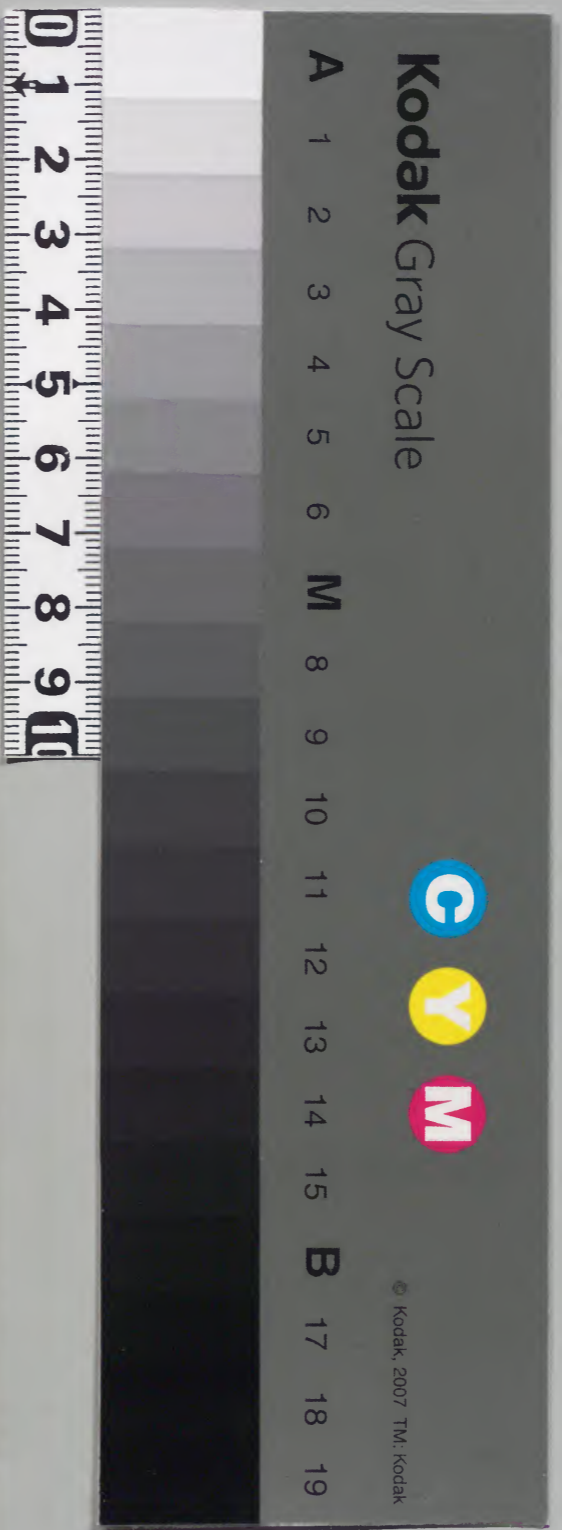


寛永諸家譜

支流 藤原氏癸廿五冊之内一

114

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(114)
函號	特 76 1





藤堂
中根

寛永諸家系圖傳

藤原氏

癸一

支流
友寄

● 虎高

源助 法名白雲好雪
牛國通江

淺草文庫

高虎

右衛門尉 作渡守 日和泉守と号す

後立位下 後立位下 侍従右近衛

権少将 中園同前

元龜元年 河内郡川合戦乃こき

浅井ゆき守長政より属して首を

得しとて高虎十五歳

田圃小岳山乃合戦数年乃る高虎

浅井小属して城とゆきしとて高虎
首級を得し

天正元年高虎河内淡海守

志とて河内小あましとて淡海守

家人河内郡多助なるは小廣初徳平

勇力ありしゆありと相とて小あましが

宅とまらわ淡海守より志とて高虎

淡海守高虎小いひくいとく油の力を

あてて多助を討と斬りあけり

なひく高虎ひそにこれの家より
那由助をうひひに斬とさし
廣部もりとも高虎ふじ子
相さひくはわり廣部をうり
けきは後者こもくくにけさわぬ
高虎十八歳なり
丹波國小山の城をせむとさし高虎
田信澄の先も小属一勇名にあり
信澄國よりかへり家老をわり

めくひひけは縋瓜のけさすき侍
一人をえよふべしと斬りて人
高虎物ぐるこり信澄のい
象をもつて物ぐるくたりよとては
縋瓜のけさなり
同七年高虎其後秀長より属
秀吉より志さるひ播磨之木城を
せむとさし城主別取長治城守
実いせきたる高虎長治の家老

六郎右衛門と港をあらせはる小幡右
首を斬秀吉大よよらへひ秀吉に
けびてなれば感す

同十年藝州毛利輝元が家人毛利
元を海中国冠乃城をゆるり秀吉
これとせし家少とさし高虎もこの秀吉に
あさびく其陣よりあし秀吉
命を出していとき城をせめね
ゆるり高虎

ゆるり城中より入敵を斬甲首
得り其後ほお小幡はせめね
秀吉その戦功を感し高虎
押し波乃羽織を脱てゆるり高虎
ゆるり高虎

但州一揆起りあひたか事
二年のるなり高虎一揆乃大為高安
と討捕そのら敵横伊波小要害を
ゆるり高虎ゆるり

城中小入敵の横をうりりし車蓋此
とのこねばあやしく牆をなすそそ
高虎を突高虎疵を叩く方と
少も被をまけく其法乃無成ぬ
けゆふ敵入り事なまら高虎
本戸口より入り高虎を叩いて
敵にまらきく追ひけ突と高虎
まらら敵二人を討ちの中一合
郎後居合孫作らば討ち其後

一揆ことくくこいりまら秀長と幼を
感一秀長三子石坂くまらこいり
同十一年江州志津嶽合戦乃時
柴田勝家乃先も作らる玄蕃元山
乃尾乃攻のほり高虎秀吉乃陣
しあまら決炮を下知して
敵一人をつまら家入渡島合戦
その首領もららこいり時高虎討股
し疵を叩く家とららこいり

志願の進志ありて秀長これと賞
しと二子石とくまふ

同十二年秀吉織田信雄と不和成
し山家臣羽柴下流も雄利坊川

松原鴻北城よりたゞこもれとき
秀長これに攻め先陣とありて

一乃不戸をや家敵志ありて
二の不戸城とらんとき

志願く相とくひ高虎甲首級を

得たり秀長高虎が軍功を介
あえしは事を感し

國系乃りをあふ

同十三年秀吉紀州をうらたし
く海とき南國北は少く

山中自播ひそくに山林より
秀吉兵を回國より

てまゝ國中にいでし
志ばくきふはかりこれとせめて

利をうけなふにゆへり高虎命を
うきく湯川をせじ湯川をき
ひやがれて和ふふまき山を
せむ事教目とうわことひめふじ
山を紀の峰よりまのさきいで
是をこゝろととの族後二百五十人
ことく見こねまき海ま外なる
はまをこれにげりあきまはるし約
とためて珠よりもの二百四十人

なりあがりなむく國中志がらぬ
秀吉と切をほめ秀吉より命を
高虎小虫石をくくしむ
同年長曾家部元親家老小余
して河波國本清なるび小一なるあ
城をゆへしむ秀吉これとせむ
少き横山隼人としふも本清の城よ
り實て高虎徳とあつてなむきり
ぞくあにきひく高虎徳をかう

少将秀吉これと黄しよらひをぬぎ
て高虎ふあつて一も後秀吉に國乃
軍政を秀吉にゆふ秀吉一書状
をうへてこれりあふ秀吉高虎よ
にほせてこれをおこれしよらひ高虎
をなをむじきしよらひわてけりこ
めがらすうにをひく元親をうひよ
本津の城主素名左衛門一又の城主
元親の舎中親安高虎しよらひわて

鴻巣一秀吉に謁し

同十五年秀吉大軍を率て九州
しよらひ鴻巣氏を征し高虎秀吉
に属し發向しよらひ秀吉又部
将祥坊しよらひ命しよらひ日川目白しよ
らひをひく附城をうへしよらひ
鴻津中務これとせめりこ城にてよ
あやうのりしよらひ高虎これと聞ひり
去る年て萩源よらひせゆく事一里

謀とめら〜敵軍にま〜りて
城申〜いり士卒とまげま〜
下知〜てい〜く秀長大軍を
ひきま〜り〜るせめとせん
事らりきにあ〜とねほいよよば
らりて扉を閉つさい〜てた〜り
事〜れば〜急な〜にまひて
敵退〜と秀吉高虎を呼戦功
と感と告祥坊がい〜く目白に

なひて勝利をゆ〜事〜ひと〜り
これ高虎一人乃勇なわと云〜是に
ゆ〜く秀吉一万石〜く〜あ〜ま
且〜と秀吉此命にゆ〜く後世
下に叙〜作渡与小任どのらあ
ため〜和泉与〜号に

東照大権現と海〜〜ひ聚樂り
なひて湯飯をの〜く〜と〜り
虎高門をた〜りてた〜ま〜り

げとき長光の法刀とすまふ
と後秀と豊去あり子息秀後子世
して嗣子なり高虎回懸と都せん
うあ高野ふりり乃り判發と其
のら秀吉志ばくも祿きをまふ
らり年とく部り其り秀吉に
謁と秀吉豫州乃固りとひく
銀七万石をうまふ 旧銀二万石
新銀五万石
慶長二年二月物解と征す海とき

高虎秀吉乃命をうけく渡海と秀
吉教ヶ條の軍法とをりて高虎よ
志めはうにをひてはあり物解ふ
し海敵船唐嶋りあり登る海
にいり日本此通海とあひさう山
七月十日日甲乃徳相唐嶋攻取
とき高虎一毒り敵乃毒船と系
取あ取ひる火とくおらて名船と
焼あかひは敵とまらて海中よ

入事よりともれり
浦十五六里此島の歌紀とことか
城一づりとも言れほりひぬ秀吉は
事成りて感懐とす
目付熊谷内藤元垣見和泉守平川
自馬首竹中源助毛利民治大吏
右田部守福原右馬助お七人連署
して高虎小志めは唐嶋乃番松高
虎一番り乃里とられひのり

高虎をもも藤守大命たをりをもて
別り使もしてはぶさに戦功を
秀吉よりび感あはさつげ長光乃
口を使者り
之後大明漢南にほもの教万南原
り城を築てこれをゆり八月十五
日此東徳ゆれとせしはと此高
虎南にりてより先陣よす
せめやがら討捕もの二百六十九名

戸を鼻をさうりて秀吉小銃と秀吉
よろこび感状とあふふと後述川水
測りいり歎服と相くくあふ高虎
底を叩くあり郎位にほく死を絶道
少もほわり歎服追及とあふに
をひて高虎すくく忠清道
にほり教ヶ取乃味とせめ根安骨
浦小口く附城と築土曾我討よ
まろくくめ高虎とてよ海船と秀吉

感状とあふ伊豫國よとひく一萬石
を加倍しとて八万石と給と
同元年石田治部少輔三成なりびよ
其後意相はりりて

大権現よりそびきくそほらん
と横河ありと海
大権現伏見より大坂より
高虎多年ありとあふはゆへり
高虎が中嶋乃弟より
台駕代

延つてもふ要害此比たりふらわて一由日
津渚留ひそくに津国談あはしく伏見
了りつてせしむる時高虎志こびひを
て目報向嶋乃清報り作し津警
固しそそらけ年高虎が津内通助
正高を人質とて江戸より送らんと
大権現津感あはしく下総國よをむて
三子石を海に流
同五年長尾京揚謀叛と

大権現伏見より發向し野列小山
いりたもふとき高虎志こびひを
了り又宇都宮をむじま

台徳院殿を涼しそむり
三成りもこの後黨をひきお上方ふ
よひく謀叛と畿内西國にほく敵と
なわぬこれよりわく小山よひて
軍評定あはし高虎が治承うけ後
より高虎の上方に發向し先

手とれおけとま

大権現の作りにいづく我汝等がほをな

まらて進敷くまふととなり

少なり

右徳院殿信國乃沖口とこまふなり

をひく高虎おまをく徳列よいなり

郷戸川をえ欲やあつて首の場

事あまこなり院お波阜乃城をまる

せめ程くまら江戸なりほをな

高虎が使者八月二十八日江戸ふり

捷と

大権現お告してゆはれハ 沖動お結

まらこまをきりひまらから使者なり

てたゆく小山乃物なりさうまら

いそき沖るぬいごたまふ屋より

うにまひて使者他田久き来り

黄金十あをいふけるなり高虎お

味方乃能ゆ少知なりまらなり

沖銀を赤坂へ海へて

大権現をもちらしてしるる九月十日尾列

契^{あつた}田^たより志^ちせしむふと此^{こゝ}自^{みづか}管^{かん}此^{こゝ}沖

書^{しよ}成^{じやう}高^{かう}虎^こふし海^{うみ}より取^と翌^{あした}日^ひ一^{いつ}交^まり

いし津^つ湯^ゆとてうよよとひく密^{ひそ}に海^{うみ}定^{ぢやう}

とうけし海^{うみ}りて赤^{あか}坂^{さか}より只^{ただ}此^{こゝ}日^ひ

十日^{じふにち}赤^{あか}坂^{さか}より沖^{しほ}よりとうけしを

し海^{うみ}ひし又^{また}日^ひふ三^{さん}歳^{さい}ふ此^{こゝ}賊^{ぞく}徒^とと國^{くに}系^{けい}よ

をひてとうひたまふ高^{かう}虎^こが家^け人^{にん}

藤^{ふじ}寺^じ新^{しん}七^{しち}郎^{らう}良^{らう}勝^{しやう}高^{かう}虎^こがわうけしよ

且^{かつ}沖^{しほ}先^{まへ}より告^{つひ}よりまごり居^ゐ積^{せき}

軍^{ぐん}よりあさむら一^{いっ}番^{ばん}首^{くび}海^{うみ}得^えより

高^{かう}虎^こすかむら家^け人^{にん}高^{かう}金^{かね}右^{みぎ}衆^{しゆ}を

ちてこれとてしるるはむらしうを

一^{いっ}番^{ばん}首^{くび}好^{こう}事^じは感^{かん}しとせし海^{うみ}ふ

とてしる高^{かう}虎^こ賊^{ぞく}徒^と大^{だい}右^{みぎ}刑^{けい}初^{はつ}少^{せう}捕^とを

撃^う屋^やあ向^{むか}時^{とき}高^{かう}虎^こが家^け人^{にん}藤^{ふじ}寺^じ仁^{にん}右^{みぎ}衆^{しゆ}

高^{かう}刑^{けい}初^{はつ}高^{かう}虎^こ大^{だい}右^{みぎ}刑^{けい}初^{はつ}少^{せう}捕^とと

高^{かう}刑^{けい}初^{はつ}高^{かう}虎^こ大^{だい}右^{みぎ}刑^{けい}初^{はつ}少^{せう}捕^とと

より外首級教にほり高虎が継
藩寺玄蕃良政不教人よりひ死を
まゝ村越を厚高虎が陣よく
里く討死とも高虎これが徳人と
そてに三成不滅亡して天下一統を
大権現高虎が功を賞し徳川家國
し海りりまて二十万石の知行に
旧帳八万石
新帳十三万石
同十一年高虎妻子をいされひ
同

居しむれ 作ふあつととしくとも
忠志をあらうとゆかり
大権現をれほごこまは感とさせ給ふ
同年浮津城作事の時高虎
作をうけし海りり繩法乃事より
あけらる止る頃辰築これ時海軍
國よりとひく二万石とくし
同

台徳院殿江戸よりとひく高虎が
同

伊予の沖にありし沖のりなりびり
銀子沖服等もも海に事候多あり
同十三年伊豫國にありたため伊予
國なりびり伊予國の中より
伊比もも海に事候多あり
なりびり

大権現沖判を高虎より海に候
同十四年高虎が郎候と人候
て江戸ふりてまはり

同十六年

大権現後府よりをひく高虎が亭り
渡沖あり尾張家並に伊予知
水戸杉屋に庵候しるの儀樂
流あり津候もの流にり同十九
年江戸沖善清れと
台徳院殿より下坂切女二回乃法持
津候と

同年の冬寺に秀杉大坂乃城り

わすく園東よりとじくげとま高虎
右徳院殿の治よりわく先より少少
ふ成し十月三日より江戸をた
ら後府より海とま
大権現乃治より大和乃徳士を率ひ大坂
じより一とまふ別高命と
うけし海よりく池の海とて小
大権現海入海ありて高虎とめされ
軍令を志めしとまふと

右徳院殿沖自筆の津書は海より
軍此事と諭し海とてより
二十六日高虎徳軍より先より河内
乃國府よりいしと件とて海翌日大
和乃徳士よりわくと時よ越前
衆議忠直と國の告げひきむて
きしり海より海にむひて高虎
小山乃を過よむすめ火をばら
歎れ比楨を察ととまふ越前の衆

道より相あはく軍事とはひり
國府より倉家聖日高虎越前大和
國乃ほもものと旗を小山よりほめて
一宿一聖日野小陣をとらひびら
和泉堺右へ伯耆なりそは聖物高虎
陣をうつして伯耆はうららよ
せんともは時沖月付其田徳波も換田
甚右忠の鈴本久右忠の山城も周の補
まゝにうららく伯耆とあひて

高をうららるる一少なり高虎い
げ地まことなるらるるは成察もた
これ利ありともゆいんもなれ東に
池あり西より幕ありうらら松原
あまは歌をささめく味方共れ
あやもともららるらん一方の歌
とばもやまこれと割とへ地日
らへ金成ありは高虎一人も飛越
海よりとららるるにまひく目使

とれららとれり志さひぬも虎
危ぐく恒吉とうらふあて安部
路溪沼陣をさる志あびのり
はくろく款乃地と梅款をさる
小火をされけと後高虎すみく
夫もさるいさ陣をさる事救日
なり

大権現とうけしとてゆつらんご
茶碓とて一勢害と叫ぶと後高虎

活玉のりおくよとら山場乃井橋を
築十一月四日とてとら端ふら
竹末と附終りさるいり溪炮を敵
款乃とあに命とうらふものり
水とたほしとせしと高虎日新志
とていよととみく城を攻事やじ
時れ十一月廿日乃新志とてとら
申の柵をさるんとて時和睦のり
軍はやめぬ

とむきひ八尾村り 右張一 萱
振村西那村若江村ふをてゆ
高虎れをんく軍れ約を察一
旗をよめて徳率を下知一
おうふ高虎が右う妙へ西郡り
をひて款とおあく首領地を
それらつひとせく 台魂ふ
うなふけるに右そ妙へ此継政者
新七郎良勝同玄蕃良重 良政
子なり

高乃騎士三十餘人ことく
ひ死と高虎豊会りあり
萱振りよひく相うふ郎佐
十餘人つあうひく命をおと
高虎がたど妙へ八尾ふじのひ長曾親
が中陣とあひ河う攻うふ
よれ継政藤守仁右米の高刑同
良勝素名孫治吉親氏山号
守成下乃あうひ三十餘人これ

討死とていふにそひて長曾部が
軍大り攻を逃と追て久賣
平野天王の過りいり討とり
そのいれいありけいこのい
上刻ふいり申の下刻り終
高虎軍勢をいり八尾村に戦場
陣と少り翌日ち歌王とあり
そひておさうゆりま

台院殿高虎が陣入り入さるい

軍に評定ありては形より陣
とほめこまふ徳軍ととり大り
そりい大よやがりて大坂の城を攻
れいいふいありれいあり
高虎が斬とる乃首九百解級
討死よりこれ七十解騎雑兵歩卒
死よりものなびあり
功をい

大権現

白鹿院殿もに沖書とて海より

六月十九日戦功と賞一と海に垣

守位下り叙せられとて坊列

乃因ふをひて番地とて石をて海より

桜又金沢乃分洞とてまゝ 後重子投

白鹿院殿も別よ高木貞家乃御湯

とて海より

同二年後府よりあてしとて

大権現ありてゆめまきの 治ありて

同聖坊府衛乃沖兼入とてしとて

同年高虎 治成うけとて海より日光

山よりとて

大権現買廟の地とてとてび大僧正天海

少お成し繩をとりてとて遊成言

上しこれと築高虎又私小一院とて

同三年山城大和乃有りてをひて

也万石地とてとて海より都合

三十二万石とて海より

同官年

白鹿院殿高虎が敏り 渡清ありて

精樂と 沖波あり 津波をたも又

ふれは

寛永二年五月二十八日

白鹿院殿高虎が敏り 入せしまひ渡り

精樂あり 津子と子あり 津惟子と

十と 海りり 且りし 津口と高浪り

海りり 津馬と 津男と 津女と 津子と

了りし海りり同六月廿日

將軍家へてめて高虎が亭り

入清精樂ありけしとき 銀子と方あり

津惟子と十と津波と志うれをあり

と津口と高浪りりし海りり 津りり

高浪りりし津りり

同年十一月十九日 治ふりりて 治

了り任

同三年八月十九日 治を治治が治

任む

同日年高虎 治と受けし海乃天海
之相談しし

大権現を長州の上野より勧請し

津廟を建て崇めし其より寧松院

と作りしと祠寺と名づけし年

台徳院殿上野乃

大権現の靈廟より

天海僧正あり

津魯詣ありし

入清乃少寺也

松院より 台駕とよせさせし

同六年三月十七日

台徳院殿寧松院より 渡清ありし

猿樂と涉説けしとき新村貞宗乃

津賜物と高虎より海乃同六月十日

將軍家寧松院より 渡清ありし

乃津賜物と高虎より海乃

渡清ありし事あり 或る津茶屋

献しありしは津越與あり

台徳院殿より体務肩衝なるびり
輝東陽乃善記ふと津信に
移すれは海に志海とあり及
凡秀吉高虎よりさづか海なる
感書教通高次今よこれと
虎涉南家之代よりつる金
友爵封禄少も一あはく
ととぬり 涉之代より海なる
法感書教通も小法自筆に
津書

教通あり高次より所持す
之海涉自筆六通とこれと津
正りにとまをとじき法はま
世に是出意地よりこれ海
乃志るさる空なるなり

同七年十月五日より年と
法名道賢道号高山院号
贈權大僧都

高次

大学助 従五位下 内侍 従五位下

大学頭 中御伊豫

慶長八年高次之葬のとき伏見ふ
をひて

大権現より湯一そまらた文室

御揃指をさしあふ

同十一年正月高次六歳乃中とき

はじめて江戸より参作と

大権現より別室の御揃指と給侍

時より大学助より侍と別室よりめく

台徳院殿より湯一そまらたり魚光の

御揃指國光は御揃指と御揃指

元和二年正月十九日 治よりわて

従五位下小叙と

寛永七年高虎が参上ことしく見

高次より御揃指と御揃指

忠世土井大炊頭利勝
上使として
信の旨を伝へる

同九年

台徳院殿乃涉書物として

將軍家より沖掛物ひもののなまのなまの
銀子五万あり

う海ら紙

同十一年

將軍家涉上海の時信旨をつとむ

同年七月廿一日 信よりわけて後官位

下小叙一信候より任に大學頭

信はと

今度海陽二條乃涉候よりをひく

涉沙詰ありて言次封國の知り取

都合之十二万之千石相違あり

ううさ海のしり

將軍家ありて沖判を言次

言次より言次

台徳院殿

お軍家
一
つ
ふ
そ
ま
う
り
父
一
お

い
ま
し
お
い
ま
し
お
い
ま
し

大助丸

家紋葛系

藤堂

嘉房

勝兵衛尉

東照大権現了り
慶長八年小死と云六十一

嘉清

後之位下 玄蕃頭

ふぐめ豊後秀次一つふ秀次豊

志くのら浪人とれり藤巻和泉守

高虎が所よあり

慶長五年石田三成謀叛と高虎先

とこれありて濃列り進發と嘉清

これ相志さる波鼻城没落の時

浪を乃こあ江戸よこり

大権現一云と一をまらるるあり

御感ありて 涉ありりめされり

いけまも黄連を洋行を

同九月十五日冥原合戦のときより

死と葬回十二

某

忠義 法名 宗音

来

少くも又和州より少く海五月六日大坂合
戦乃とき水野日向守と相対し
河山より陣し陣とあはせて高名を
寛永五年七月より病死歳四十

玄蕃 法名卜吉
藤寺和泉守高虎より此より大坂より
をひて討死と

良次

赤正

玄蕃

藤寺大學政高次より

将監

寛永六年八月父赤正の墓に
をりらあり

台徳院殿

將軍家よりつとそより

同十七年九月一死に歳三十日

嘉長

主馬 生國氏茂

寛永六年八月父が御代子不とわら

う海しり

台徳院殿

將軍家一いつふそまひ

嘉次

平右衛門尉 生國同前

寛永六年八月

台徳院殿

將軍家一いつふそまひ

嘉

勝兵衛尉 生國氏茂


兄嘉正やいなひく子とん

実る御監嘉正の子なり

寛永十七年嘉正死く後

をく福くく

將軍家一いつくくく

家紋 

系

中根なりね

市江末の尉 生國冬河
廣ひろ忍しのつりつ久織ひさ田の源た正し忠ちゆうと合あ我が
乃のとときき信しん守しゆして我が死しと

東

市左衛門尉

東照大権現トシノ御ミノ御ミノ御ミ

元龜三年げんきを討うつ方原合戦かたはらあひざりの時とき

討死うら

正剛せいこう

市左衛門尉

法名良元りょうげん

正盛せいせい

壹波守いっはのり 一ツ波守いっはのりは平十郎

台徳院殿たいとくゑん一ツ湯いっはのり一ツ湯いっはのりを討うつ

將軍家しやうぐん一ツ湯いっはのり一ツ湯いっはのりを討うつ

寛永十五年かんゑい 治ちりりて位ゐ位ゐ

下小叙しもせうじゆ一壹波守いっはのりに任まじ

教度しやうど采地さいちをくくるる御みりり都みやこてて五

子こ石いしとと任まじ

正寄

次郎左衛門尉

元和九年

將軍家より湯

寛永十八年 作ふりて小十人

但乃番頭とれ侍

同十九年 台命よりりて布衣

と志は

正朝

平十郎 ほづめれ名ハ十郎 生國

氏親

將軍家よりほづめれ名ハ十郎 生國

ちが但小郎 小姓但乃番とつとじ

家紋茗荷の丸

白雲

卷之十

抄

卷之十

抄

白雲抄

